

Title	世界政治地圖(ワルター・ パール著, 千葉秀雄譯, 清和書店發行)
Sub Title	
Author	平山, 榮一(Hirayama, Eiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.18, No.4 (1940. 4) ,p.222(784)- 224(786)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400400-0225

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近世支那外國貿易史

(米谷榮一著
生活社發行)

支那近世史に關する知識は現段階に直接連り且之に先行せる事象として今や最も吾々の關心を要求しつゝあるが、就中外國貿易はその核心とも考へらるべきもので、支那近世史が一に對外交渉史或は西力東漸史とも云ふべき性質を有することは何人も認むる所であるが、抑歐人東漸の初より、傳統的支那は商業關係を通じて西洋を知る様になつたとも云はれ、かの世界帝國たる中國を以て自負せる支那が一舉に列強の半植民地にまで引下された端緒をなせる阿片戰爭を初め、而後太平亂に原因する英國の支那關稅行政權支配と、その後の關稅自主權回復運動等々あらゆる重要事件の背後には直接間接貿易關係が伏在するのを見るのである。本書はかゝる支那外國貿易に就て、主として十九世紀より現在に至るまでをその範圍とし、著者が昨年北京にあつて蒐集せられた資料に基き詳述せられたもので、經濟的後進國として先進列強の商品市場となり原料供給地となつた支那が、先進諸國の經濟的政治的發展に従つて此等の諸勢力に支配せられ來つた様相と、錯綜せる諸外國勢力と複雑なるその影響とが示されてゐる。本書はその形式に於て幾多の資料を掲げ、敘述も多くはそれ〴〵出典の文章を採られてゐるので、一般讀者が一貫して通讀するには稍晦澁の憾もなしとしないが、それだけに又研究者にとつては手頃な參考資料として大いに著者の勞を謝せなければならぬ。定價三圓五十錢(杉本忠)。

東洋史概觀

(上野菊爾著
清教社發行)

近來澎湃たる興亞意識に應じ、事變以來此種の著書が既に數種發行せられてゐるが、その中で最新の本書は又最も良心的なるものの一つである。本書は全卷約四百頁の半を清朝以後現在に至る期間の爲に割き、近世に厚く古代に薄きは、現在の要求に應ぜる此種書籍の最近の傾向を踏襲してゐるが、地域を主として支那印度の二大文化圈に限り、又幾分活字を小としてゐる爲、近世以前の時期に關しても相當な内容充實を示してゐる。「概觀」と云ふ點に特に意を用ひられた爲か、故意に具體的記述を避け却て表現を曖昧ならしめたかと思はれるやうな箇所もないではないが、その所論と考察とは概して清新である。文章が此種の書としては稍特異なスタイルを持て流暢を缺く憾もあるが、其處に却て些細な事象をも忽にしない著者の意圖が隠されてゐるかとも察せられる。要するに本書は、從來數冊に互る尠大なものか、或は簡に過ぎ古きに過ぎる東洋史概說書界にあつて、一冊本として手頃な内容を有するものとして推薦するを憚らない。(杉本忠)

世界政治地圖

(ワルター・パール著・千葉秀雄譯
清和書店發行)

歐洲大戰の再發を繞つて、國際關係の複雑化、世界政治の幾變轉は目まぐるしいばかりであり、今や東亞に於て劃期的なる新時代に乗り出した我が國民としても、正確なる國際政治の認識を必

要とすること今日の如きはない。こゝに世界政治地圖と銘を打つて昨年末に出版せられたる本書は、かゝる要望に應ずるものとして注目に値する。原著 *Das politische Antlitz der Erde* は昨年五月に出たといひ、いま原著を手にせず、著者 Walther Pahl その人に就いても知るところはないが、譯者の序文によれば、著者は、本書の主な任務は世界政治の全般に互つてこれを具體的に解説するにあり、讀者が日常の新聞雜誌を讀むときの補助手段となれば足りる、と述べてゐることである。かゝる見地より、世界政治の現實、その動向に就き、極めて概括的にこれを把握せしむべく、スケッチマップを片面に、それに對應する説明を他面に配して、興味をもつて理解せしめんとする。説明も要領よくまとめられてゐるが、地圖の明快にして巧妙なるは、流石にドイツのものなることを思はせる。著者はドイツ流のゲオポリティークの立場を持し、ナチス的思想を鮮明に露呈してゐるが、現下歐洲の情勢と照應し、また防共諸國に對する共感的態度と共に充分に興味があるのみならず、表題に背かずしていやしくも國際政治情勢に關係ある世界の全域は、すべて觸れてゐるのが、本書の實際的利用價值を充分ならしむる點である。その中でも極東の形勢及びソ聯を解剖した箇所が、特に時局問題と併せて興味深い。全般によく列國の軍備に論及し、世界要地の戰略的意義の説明を怠らないのは著しい特色であるが、第二次歐洲大戰前夜の作物として、その緊迫せる空氣を反映せるものと見られないこともない。

從來かゝる形式の地圖としては、イギリスの J.F. Horrobin ものが代表的であり、その *An Atlas of Current Affairs* (1935).

書 評

村川堅固氏邦譯あり、*An Atlas of European History* (1935), *An Atlas of Empire* (1937) の三書は完成され、獨特の明快な描法による地圖と簡潔適切な説明とを以て、廣く利用せられてゐる。今回の本書は地圖と本文の對頁の形式に於てそれらと同様であるが、主題を殆んど政治關係にのみ限定し、かつ地圖の上に時には具象的な説明も採用し、内容も豊富詳細になつてゐる。次に譯書として氣づいた二三の點を述べれば、本書の地圖は右側にあつて、隨時に縦或ひは横になつてゐるが、これに對する本文は、悉く頁を横長にせる縦組となつてをり、繙讀の際、便ならざる場合も多い。これは原書の通例に従ひ、譯文をも縦長の横組とすべきである。地圖邦文名記入の際の誤記も二三あつたが、訂正を要する。そのほか譯者は本書紹介の序文に於て、『原著者がカール・ハウスホーフエルの創始になるゲオポリティークの流れを汲む一人云々』との一節を述べられてゐるが、これは如何であるか。何となればハウスホーフエルが今日、ドイツに於けるゲオポリティークの最も著名な代表的學者の一人であることは明かであるが、ゲオポリティークそのものの創始者は、一般にスウェーデン人の Kjellén (1864—1922) に歸せられてゐるからである。なほ譯者が、原著者の序文及び本文の序論の反譯を割愛せられてゐることは遺憾である。

以上、譯書に對する注文を述べたが、本書はその性質上もとより學術的な研究といふのではなくとも、現下國際情勢の理解に緊要な實際的資料を提供するもので、かゝる時宜に適した良書を移植された譯者の勞は多とせざるを得ぬ。譯文も極めて明快であり、

原著出版後の情勢の變化に對する補註や卷末の地名索引も讀者に親切である。(本文二二七頁、定價二圓八十錢。平山榮一)

政治地理學概論

(佐藤弘著
柁谷書院發行)

從來邦文の政治地理學及び地政治學(ゲオポリティーク)の文獻は比較的乏しかつた。佐藤氏の『政治經濟地理學(昭和三年、古今書院發行)』(これは Reinhard, Weltwirtschaftliche und politische Erdkunde (1925) によられたものである)、飯本信之氏の『政治地理學(昭和四年、改造社發行)』(なほ同氏の政治地理學研究二卷もあるが、概論ならざる故にこゝには觸れない)、高尾常磐氏の『國家地理學概論(昭和六年、目黒書店發行)』阿部市五郎氏抄譯『ズーパン政治地理學綱要(昭和八年、古今書院發行)』及び同氏の地政治學入門(Hennig und Köhler, Einführung in die Geopolitik)を中心に論述されたもの——昭和八年、古今書院發行)などが擧げられるのみである。それらの諸著はいづれも特色あり、佐藤氏のもものは Reinhard の極めてよく纏まつた、圖版の豊富なる好箇の教科書的著作の紹介であり、飯本氏のもものは、Otto Maul の權威的な政治地理學體系により論述せられた詳密なるものであり、高尾氏のもものは體系的な著述であり、更に阿部氏の兩譯書も、一は有名なる Supan の主著の紹介として、他はゲオポリティークの手頃にして簡潔嶄新なる好著の紹介として、それぞれ學界に貢獻せられたものである。

今回の佐藤氏の著は、政治地理學の諸問題につき、最も新しき

體系的敘述を企てる意圖を以て起稿されたもので、内容も豊富で多方面に及んでゐる。組織は前掲のラインハルトにより、政治地理學の本質論より始まつて、世界の住民を述べ、本論に入つて『國の外面的特徴』として、國の形態、境界、大小、位置を論ずる。境界論は現下の問題としても極めて重要な、また興味あるものであり、古今の引例を以て最も詳細に敘述せられ、本書の最も光彩に富む部分となつてゐる。次いで『國の內面的特徴』として、國の自然的地域、國民(民族問題)、經濟生活(植民地、海洋、交通の問題も含む)にわたつて述べられてゐる。最後に附録として、ウィットフォードの政治地理學論を紹介されてゐる。以上の内容の詳細にわたつて論ずる餘裕は無いが、斯學に關する最近の研究を、充分なる學的用意と明快な敘述を以て體系的にまとめられた好著として一般地理學徒は勿論、斯學の關係領域に従事する者の一讀すべきものと信じてこゝに推奨する。附表として各國植民地一覽表、資源分布狀態等の挿入あるは至便であり、卷末に詳細なる索引も附せられてゐる。

終りに通讀の際感じた二三の注文を述べることを許されるならば、本書の組版はポイント活字を使用したる横組で、地理學書としては完全に贊成するところであるが、讀者に親切なる、豊富な圖版の挿入にもかゝらず、そのあるものが、縮寫に過ぎて多少見易さを缺いたこと、全般に可成りにミスプリントの多きことが遺憾である。次に内容に就いて言へば些事であるが、二三の誤謬も氣づいた。八五頁にハドリアヌスの長城を述べたところに『その後八〇年と九〇年との間において長城・堡壘及び見張塔は皇帝